

## オランダの大学におけるIRの役割

小湊, 卓夫

佐藤, 仁

森, 雅生

高田, 英一

<https://hdl.handle.net/2324/18894>

---

出版情報 : 日本高等教育学会 第13回, 2011-01-19  
バージョン :  
権利関係 :

# オランダの大学におけるIRの役割

## —内部質保証への貢献—

小湊卓夫(九州大学高等教育開発推進センター)

佐藤 仁(福岡大学人文学部)

森 雅生(九州大学大学評価情報室)

高田英一(九州大学大学評価情報室)

# 発表の概要

- ▶ 本発表の位置づけと目的
- ▶ オランダの高等教育と大学評価
- ▶ 大学評価における内部質保証への焦点化
- ▶ IRの実態—大学経営、教育改善、評価支援—
- ▶ オランダにおけるIRの役割
- ▶ アメリカのIRとの比較から見えること

# 本発表の位置づけ

- ▶ 日本型Institutional Researchの姿を模索する研究の一環
  - 昨年度: アメリカの事例から検討
  - 今年度: ヨーロッパの事例としてオランダ

## 本発表の目的

- ◆ オランダの大学におけるIRの役割について、内部質保証への貢献という観点から考察すること。

# 1.オランダにおける高等教育と大学評価

## 高等教育制度の特徴

- ▶ 研究大学と職業大学の二元制システム
  - 研究大学(WO):研究目的(14校)。学生数は約20万人。18才以降入学、標準年限学士3年、修士1年。
  - 職業大学(HBO):専門職教育目的(41校)。学生数は約36万人。17才以降入学、標準年限4年。
- ▶ 政府の関与のあり方
  - 高等教育機関の自律性を尊重する方針。
  - 定常経費の削減・競争的の資金拡大、評価という形で説明責任を要求。
- ▶ 政府と個別大学の上に位置する組織の存在
  - VSNU:研究大学の連合体
  - HBO-Raad:職業大学の連合体

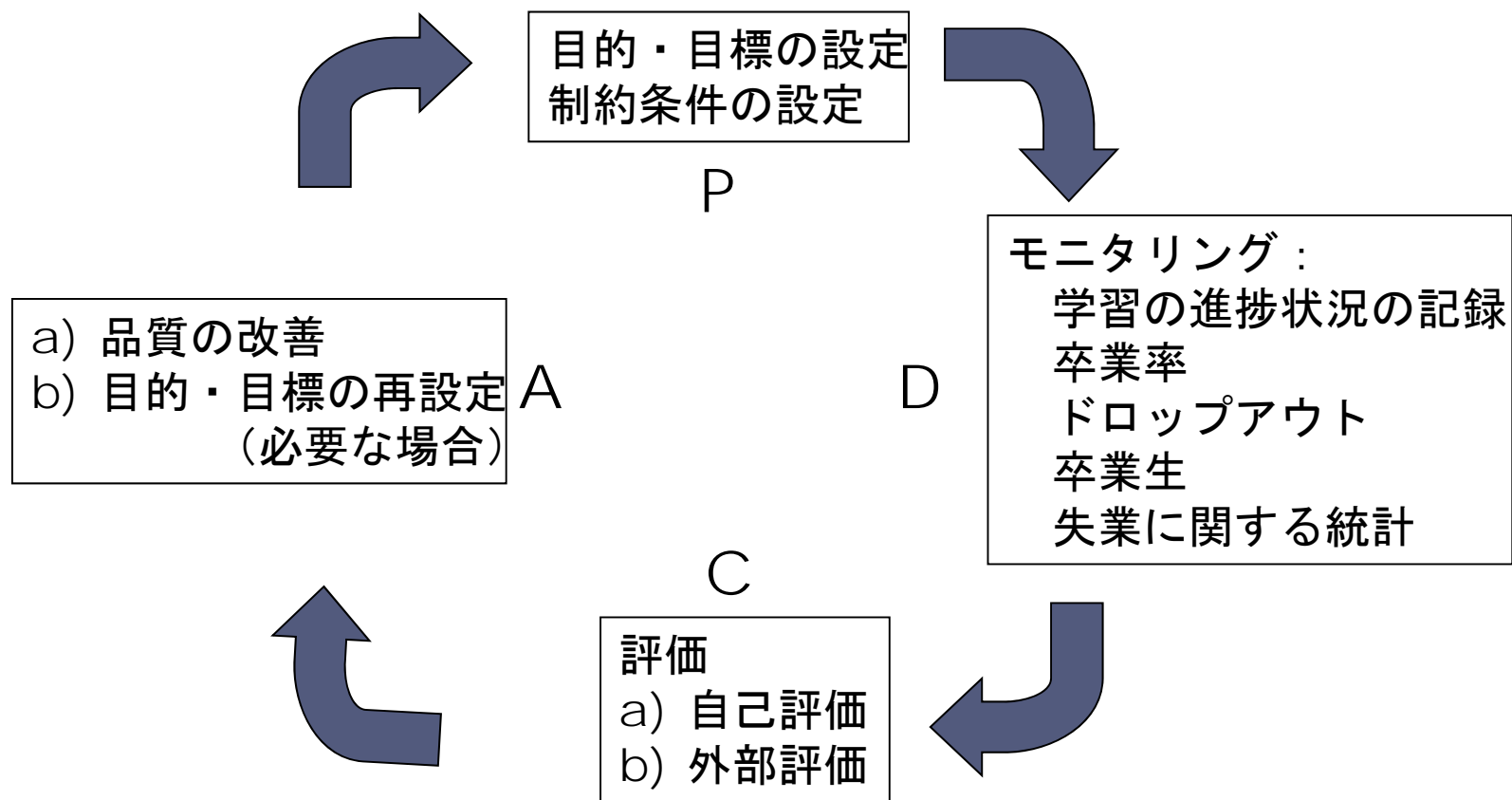
## 大学評価の特徴:教育評価

- ▶ 2002年に「アクレディテーション」の導入
  - 自己規制(self-regulation)からの転換
- ▶ NVAOによる認定:評価は以下の機関が実施
  - 研究大学:QANU
  - 職業大学:NQA
- ▶ 評価のプロセスは一般的な大学評価
- ▶ 教育プログラムごとに6年に一回評価を受ける。
- ▶ 評価の基準:目標と目的、カリキュラム、教職員、施設、内部質保証、結果

## 大学評価の特徴：研究評価

- ▶ Standard Evaluation Protocol(評価実施要綱)に基づき、QANUが評価を実施。
  - VSNU, KNAW(王立科学アカデミー)およびNWO(オランダ科学機構)により策定。
- ▶ 研究プログラムごとに6年に一回評価を受ける
- ▶ 外部評価委員には、海外からも当該分野の第一人者を招聘する。
- ▶ オランダが抱える社会問題(移民、環境)やグローバルイゼーションからの課題への貢献も問われる。
- ▶ 研究情報データベース(METIS, NARCIS)の体系的活用はあまり見られない。

## 2.大学評価における内部質保証への焦点化



PDCAサイクルの構築とそれが機能的に働いているかどうかには焦点が当てられる

フローインスティン (2002) , 65頁



# 教育評価における内部質保証

- ▶ アク্রেディテーション導入前の性質である大学の「自律的な評価」の継承
- ▶ 内部質保証にかかる基準
  - カリキュラムが目標や他の仕組みに沿って定期的に評価されていること。
  - 評価結果が目標達成に向けた改善のための手段の基礎を形成していること。
  - 教職員や学生、さらには同窓生といったアクターによる関与。

# 研究評価における内部質保証

- ▶ 現在の研究評価は自発的な外部評価が起源。
- ▶ 内部質保証にかかる4基準。

研究成果物の生産性(論文数)、研究成果の質(論文引用度)、研究成果の社会関連性(社会への貢献)、研究組織の活力と将来性。

- ▶ 社会関連性や活力と将来性が重視される。
  - 「社会関連性」の観点
    - ・ ステークホルダーとの関わり方、社会に与える影響
  - 「活力・将来性」の観点
    - ・ 戦略性、SWOT分析、安定性
  - 移民などの社会問題や環境問題、医療分野、基礎科学からの社会還元。

# 3. IRの実態

## —大学経営、教育改善、評価支援—

### インタビュー調査の概要

- ▶ ユトレヒト大学(研究大学)
  - 2月25日、14:00~17:00
  - 学術部職員3名(内1名はIR担当)、国際部職員1名
- ▶ ハーグ職業大学
  - 2月24日、10:00~12:00
  - IRプロジェクトチームメンバー4名
- ▶ ロッテルダム職業大学(ビジネススクール)
  - 2月23日、15:00~17:00
  - 評価担当職員2名、教員1名
  - ※IRではないが、IRが評価支援を担うという観点から調査。

# (1)大学経営の側面：ユトレヒト大学

## ▶ IRの概要

- 財務分析からスタート。
- 学部の中にIRを担当する職員が存在(3.2FTE)。
- データベース構築から分析・報告まで。
- 報告先：理事、監事、評議員、部局長。

## ▶ IRの役割

- 学内の計画と進捗管理。
- 教育研究の質保証に関する部局への支援。
- 政策決定・政策評価に関する執行部への支援。
- 戦略プラン立案に関わる。

# (1)大学経営の側面：ユトレヒト大学

## ▶ IRの特徴

- 学内からの期待や信頼を自覚している。
- 事務局本部に存在している。
- 大学の将来計画や戦略プラン策定に関与する。
- 研究・教育プログラム単位(部局)で、関連する機関情報を提供する。
- 教育・研究プログラムにおける改善には直接かかわることはないが、将来計画を通して間接的に関与。

## (2)教育改善の側面：ハーグ職業大学

### ▶ IRの概要

- IR室は存在せず、一種のプロジェクトチームとして存在。
- アクレディテーションは他部署が対応：オランダでは一般的。
- 大学全体に関わる”research”を行う。

### ▶ IRの役割

- 大学の戦略計画と結び付いた執行部等からの「問い」に答える。
  - ・ なぜ男子学生の方が退学率が高いのか？
  - ・ なぜ就職者の満足度が低いのか？

## (2)教育改善の側面:ハーグ職業大学

### ▶ IRの特徴

- チームは5つの調査を行い、そのデータを管理している。
  - ・ 学生満足度調査
  - ・ 初年次学生の経験に関する調査
  - ・ 同窓生調査
  - ・ 就職者調査
  - ・ 留学生調査
- これらのデータ(+各学科等から提供してもらう基礎データ)をデータウェアハウスで管理・分析(Study Success Project)している。
- これらの調査のデータはアクレディテーションでも利用される。

## (3) 評価支援の側面：ロツテルダム職業大学

### ▶ 評価支援の概要

- 各学科の年度計画の評価やアクレディテーションへの支援（全学で戦略計画を策定し、学部で4年間の中期計画を策定、学科では年度計画を作成し自己評価を行う）
- スタッフ(コーディネータ)は各学部に2, 3名が割り当てられ、総勢35名のスタッフ
- コーディネータは評価機関、大学教職員の出自

### ▶ 評価支援の役割

- 評価のスケジュール及び進捗の管理
- 評価書作成に必要なデータ(定性的データが中心)の提供



### (3) 評価支援の側面: ロッテルダム職業大学

#### ▶ 評価支援の特徴

- 評価支援のコーディネータはその業務をIRとは認識していない
- 内部質保証に焦点化されたアクレディテーションのため、定性的データの収集と提供
- そのための文書管理システムを導入
- コーディネータは評価機関、大学教職員の出自
- 学科毎の評価を行うためほぼ毎年評価を受けることとなり評価支援の機能が専門化(ロッテルダム職業大学では11学部52学科、修士課程を除く)

# 4. オランダにおけるIRの役割

## 内部質保証への貢献が意味すること

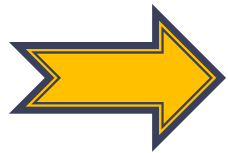
- ▶ 大学評価における内部質保証の重視  
→ 量的なデータではなく、質的データの重要性
- ▶ これらの質的データを利用して、PDCAサイクルが機能していることを示すことが求められる。



- ◆ どのようにIRが貢献しているのか？
- ◆ 内部質保証において、IRはどのような存在なのか？

# 実態から見える特徴①

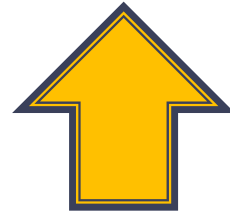
- ▶ 設定されている目標や目的に直結した評価・改善活動の促進
  - ユトレヒト大学：将来計画や戦略プラン策定への積極的な関与。
  - ハーグ職業大学：戦略計画に基づく「問い」への対応。



PDCAにおけるCheckとActionという独立した活動をするIRではなく、Planに結び付くCAの機能としてのIR

## 実態から見える特徴②

- ▶ 部署(領域)ではなく、機能としてIRが存在。
  - ユトレヒト大学: 学術部の人員
  - ハーグ職業大学: プロジェクトチーム
  - アメリカのようなIR室を有している大学は、ほとんどない(アムステルダム大学のみ)



- ◆ 定型的なレポートの少なさ
- ◆ 量的データベースの管理の必要性の低さ

## 5. アメリカのIRとの比較から見えること

### ▶ アメリカにおけるIRの存在背景

- 外圧、情報技術、人材

### オランダのIRを当てはめると・・・

- ◆ 外圧：大学評価という外圧はあるが、データ提供という性質ではない。
- ◆ 情報技術：量的データがあまり求められないゆえに、DWH等はまだ目新しい。
- ◆ 人材：機能として存在するゆえに、専門性の土壌はまだ大きくない。

# 外圧、情報技術、人材の関係性から

## ▶ アメリカ:

- 定量的データ(ランキングや学内外の比較)
- →DWHの導入
- →IR人材の必要性大
- →専門オフィスの設置(領域としてのIR)

## ▶ オランダ:

- 定性的データ(内部質保証)
- →文書管理システム
- →IR人材の必要性は大学によって異なる
- →組織内部で緩やかに分化(機能としてのIR)

# 日本型IRの構築へ

- ▶ IRを機能からスタートさせる実現可能性
  - すでに日本でも存在している？ただし……
    - ・ それぞれの活動に統一性はあるのか？
    - ・ Planとどう結びついているのか？



- ◆ IR活動を調整する役割（人:coordinator）の必要性
  - ◆ 管理業務だけでなく、マネジメントを推進できる存在。
  - ◆ “Research”を遂行できる存在。



# 参考文献

- ▶ 林隆之(2006)「オランダにおける大学の研究評価の展開」『大学評価・学位研究』第4号、39-50頁
- ▶ フローインステイン(2002)米澤彰純・福留東土訳『大学評価ハンドブック』玉川大学出版部。
- ▶ 森雅生、佐藤仁、高田英一、小湊卓夫(2009)「アメリカ型IRの日本における実現可能性」日本高等教育学会第12回大会発表資料。
- ▶ 米澤彰純(2000)「オランダの大学評価の動向と課題」米澤彰純編著『大学評価の動向と課題』(高等教育研究業書62)広島大学大学教育研究センター、41-49頁。
- ▶ Marginson, S., Weko, T., Channon, N., Luukkonen, T., & Oberg, J. (2008) *OECD Review of Tertiary Education: Netherlands*, OECD.
- ▶ de Jonge, J., & Berger, J. (2006) *OECD Thematic Review of Tertiary Education: The Netherlands*, EIM (Onderzoek voor Bedrijf & Beleid).

本研究は、平成20～22年度科学研究費補助金基盤研究(C)「国立大学法人におけるPDCAサイクルの構築に向けた経営支援の実践的研究」(研究代表者:高田英一)の研究成果の一部である。